

# ダイジョウブ

近藤 みさき (東京都)

「子どもたちには辛い経験をさせたくない」そう願うのが大人の考え。

確かに、一日を過ごす中で笑っている時間が多い方がいいに決まっている。でも、笑っているだけの一日を365日送っている人はいない。

3・11の時、園の子どもたちを守ることで精一杯だった。地面の底から地震音が聞こえ、いつ止まることも知れない大きな揺れが続く中で「ダイジョウブ。ダイジョウブ」「先生たちが居るから」と。何が大丈夫なのか、本当に大丈夫なのか、大人だってわからない不安の中で、ただ、ダイジョウブと子どもたちに言い続けて

びにするのだろうか。時が流れ、地震ごっこをする子どもは、ほとんど見かけなくなった。ただ、避難訓練を実施すると、とても素早く防災頭巾を被り、避難できる。以前の様にふざけて訓練に参加する子どもたちはいない。

自分の歩んできた道を振り返ってみる。笑っている日より、辛く悲しく泣いている時のほうが印象深い。立ち上がれないほど泣き、なぜ自分だけこんな経験をしなくちゃならないのかと、人生を悔やみ、もう二度と心の底から笑うことはないと思ったあの日。数十年が経ち、今度は地震にあい、思ったことがある。数年しか生きていない多くの子どもたちが経験した3・11。起こってしまった事は消えてはなくならない。そして、きつと、そんな経験が心を強くする。悔しいけど、子どもたち自身が経験から学び取ったもの。これが子ども自身の心に芽吹き、これが

いた。迎えに来る保護者に安全を祈りながら引き渡した。寒い中で、布団をコタツの様にかけ、迎えに来ていない子どもたちが不安にならない様に必死で笑顔を作った。ダイジョウブ。きつとダイジョウブ。

あの日経験した事は、まるで頭の中にアルバムがある様に1枚ずつシャッターがきられて残っている。子どもたちもそうであろう。まだ数年しか生きていない中であんなに恐ろしい経験をしたのは初めてだったのでないだろうか。

3・11後、地震が遊びになった。「みんなー、地震がきたー。きゃー」と言ってる机の下に避難する。大人は思い出したいから、「地震ごっこなんてやめなさい」と言う。その場は止めても、又別の所で地震ごっこが始まる。その繰り返し。なぜ、子どもたちは地震ごっこをするのだろうか。怖かった、思い出したいくない経験を、遊

らの人生を送る中で、自分で辛いハードルも跳べる力となる。

きつとダイジョウブ。どんなに辛い経験をしても、乗り越えられると信じる心、私たちが子どもたちに伝える言葉はダイジョウブ。それしかないのかもしれないと思う。

小さい子どもたちだと思っていたら、先日言われた。「ダメなんかじゃない。ダイジョウブ。何でもできると思えば何でも出来るよ」と。辛く、怖い経験というハードルを越えてきた子どもたちはいつの間にか成長している。

